

『1984年』の世界

——新しい資料にみるオーウェル像——

難 波 勝 平

ジョージ・オーウェルの『1984年』は1948年に書かれた。近未来小説とも読まれ、彼が「この本が諷刺であるという事実を考慮しながらも、そんな社会が必然的に来るだろうとは思えないが、それに似たものが来ることがありうる」と信じる¹⁾と説明したその歴史的な時間である1984年は過ぎた。「ありうる」状況はまた「ありえた」状況となり『動物農場』の歴史劇の寓話と共に、その本質的な諷刺の対象は「諷刺である事実」が鮮明となることによって、読者には一層身近かなものとしてとらえられるようになるだろう²⁾。この小論では、オーウェルに関する新しい資料の発見や、原文改訂を通して、小説『1984年』の位置を考えると共に、私にはこの小説の本質的なものと思われる政治と宗教との結びつきをみてみたい。

1. 映画『1984年』の中心点

1985年6月1日、第1回東京国際映画祭で『1984年』（監督マイケル・ラドフォード 製作サイモン・ペリー）が上映された。以前にも映画化されているが³⁾、今回の製作者サイモン・ペリーは次のように語っている。「本と同じように、映画の中の本当の愛情問題はウィンストンとオブライエンの間にある。拷問の場面でウィンストンは、不可解だが激痛の瞬間が慰さめとなり、非常に親密さの一つとして受け入れた、とオーウェルは書いたのだ。そして監房の中でオブライエンは、このことをはっきり認めなさい、お前はこうなることを知っていたのだ、と云う。ウィンストンはこの結びつきをどうしても必要として

いるから追い求めている」「この映画は背信と共犯についてだ。反逆者ウィンストンは歴史を偽造する仕事を楽しんでいる……これがこの映画の本質的な考え、即ち、心の本質的な状態である反逆と共犯とのあの組み合わせなのだ」⁴⁾。このオブライエンとウィンストンの結びつき、そして「背信と共犯」という指摘は鋭い。ジェイムズ・バーナムが『管理革命』に、新しく勃興しつつある計画的中央集権社会に支配者になるのは生産手段を能率的に統轄する「管理者」だ、と主張するのに対して、オーウェルは現状の追認としては説得的であるけれども、これはバーナム自身の「権力崇拜」のあらわれとその「願望の理屈づけ」であり、「それは人間社会が保たれるためには、いくつかの行動規範に従わなければならない事実」を無視しているために正しくない、と批判する。だがこれはまた、知識人が「古い平等主義的な社会主義の見解を破壊し、ようやく鞭に手をかけることのできる階層性社会を導入したいという願望を表明している」⁵⁾ともオーウェルは見る。そしてその知識人の願望には真実が含まれている。このことを後で触れるように、『ジョージ・オーウェル：一つの生き方』を書いたバーナード・クリックは『1984年』の中の諷刺の対象の一つとしてとりあげている。映画の中でウィンストンがオブライエンに肩を抱かれ、共に黄金郷を思わせる美しい風景を見る象徴的なシーンがある。映画は象徴というテクニックによって、鋭く深くかつ広いイメージを伝え得る。この映画では、喫茶店「栗の木」で、拷問によって洗脳されたウィンストンが、テレスクリーンからの自国の勝利を聞き、神あるいは父を思わせるビッグ・ブラザーへ涙をうかべ、それから視線を虚空に向け‘I love you’とつぶやいて終る。観客には、その直前にウィンストンが罪を告白しているテレスクリーンを見たとしても、これも洗脳されたジュリアと会い、その後テーブルに $2+2=$ で手を止めることによって彼に一片の人間らしさが残っているのではの暗示から、you がビッグ・ブラザーかジュリアかあるいは両方かはっきりしない。だがこの等式は $2+2=5$ としなければならなかったのだ。これはピーター・ディヴィスンによって発見された。

2. P. ディヴィスンによる改訂

オーウェルの原稿が「率直さや登場人物がすぐ誰だかわかる傾向、ある場合には実際の広告や政治スローガンを使用していたために、出版社は不安になった」そして「訴訟や告訴を恐れてオーウェルに変更を要求した」。これを伝えている新聞にも皮肉られているように「『1984年』体制はオーウェルにはもっと前にはじまっていた」⁶⁾のだ。それでケント大学の前英語学教授 P. ディヴィスンによって改訂が進められ、その中で $2 + 2 = 5$ であることが発見された。ビッグ・ブラザーへの屈服に少しあいまいの感を残す $2 + 2 =$ ではなくて、完全にウィンストンは屈服したのだ。これはディヴィスンによれば印刷工の責任であるとしている。アメリカ版やいくつかの外国語版では完全な等式になっている⁷⁾。我が国で最初に訳された昭和25年の滝口・吉田訳では $2 + 2 = 5$ となっている。イギリスではずっと $2 + 2 =$ であり、日本で今一番普及している新庄訳（早川書房）はセッカー版をテキストにしているため $2 + 2 =$ となっている。ディヴィスは次のように書いている。「5の数字がないことはウィンストンがどうにか自分の独立と誠実を守っていることを暗示し、これによれば楽天的である。しかしながら5が入ることは非常に悲観的になる。ヨーロッパ最後の人間——『1984年』はもう少しでこのタイトルにされそうだったように——ウィンストン・スミスはビッグ・ブラザーに屈服してしまった。これがオーウェルの云いたかったことだと思う」⁸⁾。クリックも「その体制がはっきりと $2 + 2 = 5$ でウィンストンがそれをはっきり受け入れることを示すためではなく、彼が今や連中の云うことを何でも受け入れたこと、連中は完全に恣意的に出来ることを示すために、オーウェルが最後の校正の段階で5を失くしたかも知れないという心ひそかな思いを抱くし、その方がオブライエンの主張の線にもっと調和している」⁹⁾ けれどもディヴィスンに従うと云っている。しかしこの等式にはもっと深い意味がこめられていた。この $2 + 2 = 5$ は、オーウェルが1939年にバートランド・ラッセルへの書評で「指導者が命令すれば2たす

2も5になるような時代」と書き、これはまた前年に書評したユージン・ライオンズの本に書かれてあった。これはソ連の「4年のうちに5ヶ年計画を」が $2+2=5$ の象徴となったものである。さらにこれは、英文学史上最大の奇書ともいうべき、脱線また脱線の連続かつ諷刺とユーモア、感傷のロレンス・スターン『トリストラム・シャンディ』の中にも同じ等式がある。反鼻派が鼻派の「神の力は無限だ……神は物質に考えさせることだって出来る」という主張に疑問を提すると、鼻派は思わぬ加勢を得る。「神は2たす2を5にだって出来るのだ、カトリック派の博士が応じた」¹⁰⁾。この等式は常識と非常識の紙一重の状態をあらわす象徴でもあり、そして後にみる「神」を選ぶか「人」を選ぶかの政治と宗教のからみあいの象徴でもある。オーウェルの諷刺の対象への深さと広がりは大きくなり、かつ鮮明になろうとしている。

ディヴィスンの改訂を『牧師の娘』と『パリ・ロンドンどん底生活』でもみてみよう。『牧師の娘』の中でウォバートンがドロシーに乱暴するところを今までのテキストは Mr Warburton..... begun making love to her, violently, outrageously, even brutally. (ウォバートン氏は……激しく、みだりがましく、粗暴なまでの態度で彼女に云い寄った) (三沢佳子訳) とあるが、オーウェルの原稿では brutally が 'tried to rape Dorothy'¹¹⁾ となっていた。これはドロシーが記憶喪失に陥る伏線となっていることがはっきりする。『パリ・ロンドン』ではオーウェルのユーモア精神とその源の一つをまた暗示する変更がある。12章の最後の方に and as he opened it (=the door) he farted loudly, a favourite Italian insult. (そして彼は戸を開けて、お気に入りのイタリア風の侮辱を派手に一発やらかした) が、he delivered a final insult in the same manner as Squire Western in Tom Jones (彼は『トム・ジョーンズ』の中でのウェスタン卿がやったと同じ方式で最後の一発をおみまいした)¹²⁾ に変えられた。

3. W. J. ウェストの新資料発見

セッカー&ウォバーク社はオーウェルの作品9巻（すでに6巻発売）と、さらに手紙とエッセイの8巻5000ページを出そうとしている。しかし、手紙とエッセイの方はなかなか出版するのが難かしいだろう。1984年に、第二次大戦についての学者で蔵書家であるウィリアム・J・ウェストがオーウェルのBBC（英国放送協会）時代の、彼の手になるラジオ放送原稿や多数の往復書簡を発見したからだ。クリックが「オーウェルが才能を浪費した」¹⁹⁾とした期間を埋めるものである。これがW. J. ウェストの編で‘Orwell: The War Broadcasts’と‘George Orwell: The War Commentaries’となって出版された。前書についてジョン・ウェインが批評をしている。このインドの学生を意識して放送した原稿は「彼の散文がいつもそうであるように、読むに楽しいばかりでなく、かなり面白くて有用だと云ってよい。その上、もちろん、その関心の最たるところは、それが戦時に関するという事実であり、オーウェルの人生においてとても重大な転換点であったからだ」として、スペイン戦争から帰って後の不満いっぱいの「革命的社会主義者」、そして戦争がはじまっの反軍国主義者が、独ソ不可侵条約によって革命的愛国主義者になるこの時期のオーウェルをスケッチする。この変化は彼のまわりの社会主義者・平和主義者の中ではすぐさま不人気になったろうが「しかし、彼がスペインで銃剣に直面することが出来るなら、ロンドンの喫茶店で嘲笑に直面することが出来るのだ」としてその勇気を認める。そして「この期間は彼にとって決定的な橋だったのだ。ウェスト氏の本はそれをはっきり見えるように手助けしてくれる」。さらに放送の中で扱ったバーナード・ショウ、オスカー・ワイルド、エドモンド・ブランデン、シェイクスピア等と共に「オーウェルの人格に大きな意味のある二人の作家、ジャック・ロンドンとスウィフトに特に面白い取扱いがある。スウィフトとオーウェルの想像上の会話の形をとったものはそれだけでもこの本を手に入れる価値がある」とし、また大量の手紙の中でも「E. M. フォスターと

のものはちょっとした掘り出しものだ。なぜなら全部にフォスターの返事があるからだ」¹⁴⁾と紹介している。

この新しく発見された戦時放送の中に『英国食糧事情と潜水艦戦争』がある。1914—18年のイギリスの食糧事情と比較した中で「もちろん、私はその頃イギリスにいなかったし、自分自身の経験から語るつもりはない。しかし35才以上の、あるいは30才以上でもだが、すべてのイギリス国民はその時の戦争をはっきり覚えているし私は非常に多くの人々と語りあった」¹⁵⁾と放送している。オーウェルはこの時38才であり、前の大戦の期間はもちろんイギリスにいた。戦時放送でジョージ・オーウェルの名前を使うことが許可されたのは1942年の終り頃であるから、この放送の時は本名のエリック・ブレアである。だから自分自身のことを韜晦しているのは聴き手に親しみと客観的な耳を持たせるテクニクとだけ考えるべきだろうか。「率直で誠実」なオーウェルの文章を理解する手がかりとなろう。例えば『象を撃つ』『絞首刑』においてクリックは「彼の『象を撃つ』が1940年の『ペンギン新短編集』にジョン・レーマンによって再録された時、13人の他の寄稿者のうち12人が同じような一人称の文体で書いて、明白に「事実」か「フィクション」として位置づけるには難かしく、すべては体験としては真実に見えるが必ずしも事実ではない」¹⁶⁾として、ロバート・A・リーの‘Orwell’s Fiction’を引きあいに出している。ジョン・ウェインが『動物農場』について「あまりにもその調子とその判断のバランスのとれた美しさにおいてほとんど評論文の一つを思わせるほどに非常に似ている。それは結局は寓話であり、寓話はその完全な創作的感覚においてはフィクションより批評に近い」と云うのに対して、リーは、動物寓話というのは「読者に絶えず二重の像を意識させる。動物による寓意は比較と対称における皮肉を伝^{フィロニー}えるのに影響しあう二つの知覚レベルを指示する。オーウェルのエッセイは、それらが物語に近い『絞首刑』や『象を撃つ』におけるようにフィクションとの際にある時にのみ反語的なものだ。こういう種類のエッセイにおいて、ジョン・ウェインは心の中にオーウェルは誠実であり率直であるから、その調子は隠

しだてしない率直なものだと思っている』¹⁷⁾と云っている。オーウェルは絞首刑を見たことを肯定したり否定したりしている¹⁸⁾。オーウェルの代名詞になっている「誠実と率直」をそのままとるのは危険だ。彼は一つの出来事、あるいは人物も象徴として使う。スティーヴン・スペンダーを「客間のボルシェヴィキ」などと攻撃したのも、自分でも云っているように「君を象徴に使いたかったのだ……君をひとつの類型としてまた抽象としてみた」¹⁹⁾のだ。だからこの象徴をめぐる論戦をまきおこし、その論戦の中から自分の仮説を試し鍛えてゆくのがオーウェル流なのである。ウェインがオーウェルを本質的に偉大な「エッセイスト」であり、かつ偉大な「^{ボレモレスト}論争的作家」として力点をおくのと結びつく。かかる観点は『1984年』を見る場合に欠くことの出来ない点である。

4. クリック版『1984年』

ディヴィスンが校訂したものをテキストにしてクリックは『1984年』の批評版を出した²⁰⁾。序文には、『1984年』は小説であり諷刺であること、秘密の鍵のある寓話あるいは病的な予言ではないこと、その時代のコンテクストを明らかにすること、オーウェルの全作品の中にこの本を位置づけること、諷刺の標的や彼の意図を明らかにすること、そしてこれが彼の遺書であるとか死の願望、社会主義と絶縁したなどという神話を一掃するために書いた、としている。そして、一番最初にこの本を読んだ出版者のウォバーク以来の批評の歴史の中で、オーウェルのスウィフト的諷刺の意図が軽視されてくるのは、この作品を書くためにオーウェルが命を削ったという事実が知られるようになってからだ、としている。クリックは主要な諷刺のテーマを七つあげる。1. 世界の分割 2. マスメディアとプロレタリア化 3. 権力欲と全体主義 4. 知識人の裏切り 5. 言語の悪用と墮落 6. 歴史と真実の破壊 7. 反バーナムのテーマである。

テキストとしての大きな変更は先ほどの $2 + 2 = 5$ と、小説の最後に The

End をつけ加えることだ。The End のある事は、小説の出だしの「4月のある晴れた寒い日で、時計は13時を打っていた」というコミック・タッチが、昔のB級映画の伝統的な終りでのようにもう一回繰り返される²¹⁾。時代状況として、BBCはすでにテレビ放送をしており、ヘリコプター、インク・ペンもあった。体操は毎日行なわれていた。Minitrue（真理省）などの名称は実際にMin Ag（農業省）があったし、そこからの配給手帳のMin Food（食糧局あるいは食糧のマイナス）という二重思考の見本もあった²²⁾。しかし、原爆の落とされたコルチェスターは、ローマ占領時代に反乱を起こしたボーデシアの中心地であるという示唆は、イギリス史の常識に欠ける私には絶望的な気をおこさせる。

クリックは繰り返し、この諷刺をスウィフト的諷刺と呼んでいる。「それは目標（全体主義もその一つ）の多様性という意味で、そして人間性に絶望したふりをしているが完全には絶望していない猛烈なカリカチュアの両方においてスウィフト的である。『ガリヴァー』と『1984年』はそれが絶望と冷笑にころげこんでいないという意味で諷刺にとどまっている」²³⁾。

『ガリヴァー』に対して攻撃型批評と弁護型批評が繰り返しあらわれる批評の歴史は、『1984年』との関連で示唆的である²⁴⁾。オーウェルもこの論戦に参加して、スウィフトともう一人幸福を信じなかった男トルストイとの共通点をみて「両者とも権威主義的気質と同様のアナキスト的見解を抱いていた」²⁵⁾とする。第4巻のフィヌムの、世論で強制する世界に、アナキストや平和主義者の社会観に含蓄された全体主義的傾向をかざっている。オーウェルには、専制というものがどうしても許せないものであった。彼の友人でアナキストのウドコックはそのフィヌムの世界の精神的専制の危険性に同意している²⁶⁾。諷刺は確かに解釈するに難しい手段だ。例えば次のW. B. エイウォルドの「ガリヴァーは結局スウィフトの諷刺的メッセージの説明役であると同時にその諷刺対象である」²⁷⁾という指摘は、『1984年』のウィンストンとオブライエンを見る眼を変えさせてしまう。支配一被支配をそのままとってはならないし、共に

腐敗することもあるのだ。拷問の過程でウィンストンは文字通り腐りかけ、一方のオブライエンも老けこみ、疲れ果てた顔となる。象徴は本質的なものであるがまた抽象化でもありあいまいさを伴う。オーウェルの扱う分野が広く、象徴は他の象徴と結びついて複雑化する。

『1984年』の全体主義社会への痛烈な諷刺の一つは、ウィンストンとオブライエンのやりとりの中の次のところであろう。オブライエンは「その気になりさえすれば、私はこの床上からシャボン玉のように浮揚出来る」として「何事も存在し得ないよ、人間の意識を通じなければね」と結びつける。これは古典的な唯物論と唯心論論争の教科書的カリカチュアである。「これは唯我論ではない。お望みとあれば集団的唯我論といってもよい。しかし本質的に違う。実際には正反対のものだ」²⁸⁾とオブライエンが云う。私もこれに名前をつけてみよう。「二重思考的弁証法的唯物論」と。しかし、こんな言葉遊びはこれをパロディや諷刺ととれる立場である。オーウェルの自然主義的手法によって、客観的真実の実在が疑いをもたれ、かつそれに屈服してしまう社会を身近かに見る読者には、それはブラック・ユーモアでさえなく暗然たる気持ちにさせてしまう。オブライエンは次々と繰り出す問題を試金石として読者の知的誠実さを研ぎ出す。このオブライエンに、諷刺家オーウェルを垣間みるのは私だけであろうか。

5. 新しいオーウェル像

ビルマの帝国警察官として勤務していたマンダレーから、社会主義者として宣言するウィガンまでの道は遠いものだった。帝国主義の擁護者の一人であった時のオーウェルは「イギリスが比較的恵まれた状態で生存していくためには、数億のインド人が飢餓すれすれの状態で生きていかねばならない」²⁹⁾とキップリング的に反発した。そしてトルストイが1857年にパリ滞在中に目撃したギロチンによる公開処刑で「頭が胴体から離れて籠の中へ落ちるのを見た時

に、現存する秩序の条理に関するいかなる理論もかかる行為を是認することが出来ないということを、私の生命の全力をもって理解した」⁴⁰ ように、オーウェルもビルマで見た（と云っている）絞首刑に象徴するものから「私はすべての支配は害悪であり、刑罰は必然的に犯罪よりも有害であり、人々は干渉さえすれば道をふみはずすことはありえない、という無政府主義的な理論を編みだした。しかしこれはもちろん感傷的でナンセンスだった」⁴¹ と書いた。それらのリチャード・リースをして「彼は実際に社会主義・共産主義の理論的権威者よりもずっと優れたマルクス主義者」⁴² と書かせるまでになったのは、ビルマでイギリスでスペインで体験したものを深め、確かめていったのは言うまでもないことだが、その時期はビルマからの帰途に寄った叔母のネリーとその共同生活者の「ランティ」（本名ウージェヌ・アダン）の家であったという研究がある⁴³。「ランティ」はエスペ란チストで、1920年にフランス共産党に入党、1922年モスクワを訪問した後、ソ連の体制を批判し党からも離れる。レバンドフスキーの『革命下におけるロシア・アナキスト運動の概要』を会の機関紙に掲載しているのをみるとその傾向の一端が理解されるように思われる。オーウェルは革命とコミュニスト体制を称賛し、アダンはその考えをものは捨てたと云い、叔母の前でつかみかからんばかりにやりあった⁴⁴。二人の間はマルクスとブルードンの、ボルシェヴィズムとアナキズムの、即ち「権威主義的」共産主義と「自由」共産主義の、プロレタリア独裁による国家権力の、権力を維持するための中央集権的な組織とそれを荷う官僚の、~~そが~~云々た問題についての論戦が繰り返されたであろう。これらの論戦は、スペイン戦争で実際にまた繰り返されることになる。『動物農場』と『1984年』はオーウェルのたどりついた一つの結論とみる事が出来る。さらに社会主義の本来の目的と理想であるユートピアあるいは黄金郷を常に重大な意味をこめて作品の中に現わす。またこれは、『1984年』の中で、主義のためには「子供の顔に硫酸をかける」ことと、ウィンストンが激しい拷問の最後になって「ジュリアにやれ！」と叫ぶ場面の間に横たわる距離の問題でもあった。

オーウェルは、人間社会の物質的差別の解決のために政治に最大の関心を持ち、そのために作品を書いた。だが、これを「腹」の問題とすれば、常にそこには「魂」の問題がある。「たとえ祈禱書の神がもはや存在しなくなっても、われわれは神の子にちがいない」として、『来世』を必要とせずに人間兄弟の信仰を回復させることができる」⁸⁹ ことが現代の大問題だ、とオーウェルは云う。これは『1984年』の中で、オブライエンを神とすればウィンストンが心ひかれながらも抵抗したもの、 $2+2=5$ であってはならないもの、アブラハムがイサクを神に捧げるような場面である「ジュリアにやれ！」と云ってはならないものでもある。オーウェルは17才ぐらいの時、キリストの性格に関するウィンウッド・リードの『人間の殉教』を読んだ。「そこにいるのは、キリストを神の子としても認めないし、当時の流行のように『偉大なる道徳の教師』としても認めず、ただ単にほかの人間と同様の、誤りがちな人間——だいたいにおいては高貴な性格だが、重大な欠陥もあり、ともあれ、連続と続いている非常に類似したユダヤ教の狂信者のひとりでしかない人間——として提示されているだけであった」。そしてこれを読むことは「奇妙に解放的な経験であった」しこの著書に「ひとりの親友を発見した」⁹⁰と感じた。これは我が国の作家・遠藤周作の『死海のほとり』で描く、「見捨てられた病人のところへ来て、ただいつまでも側にいる、それがイエス」だとする同じ根のものである。オーウェルが「200年前に生まれていたら、私は仕合せな牧師になっていたかもしれない」⁹¹とうたった「牧師」がここに見られる。これと結びついた社会は人間的な社会主義を指向し、一面これはマルクスやエンゲルスが残しておいた部分でもある。これはオーウェルが、人は、「神」すなわち「来世的理想」か「人」すなわち「現世的理想」のどちらかを選ばなければならないし、「人」を選んだ場合は破滅を覚悟しなければならない⁹²、としたものとつながるところである。私にはオーウェルの姿が、宗教という権威にぬかずいた宗教的無政府主義者のトルストイおよびそれにつながるガンジーとの流れと、それにある距離を置いて並列する流れの中に浮かんできてならない。

6. 結 語

オーウェルは彼の全著作の中で最も複雑で野心的な小説『1984年』によって、おこりうる全体主義社会の中の人間像とその未解決な部分をも含めて私たちに描き出した。そこにはその社会を呼びこまないための必死の思いがある。それは知識人ウィンストンが「黄金郷」を「オブライエンと共に」夢見ることではない。さらにまたトルストイが「(正教) 教会がわれわれに啓示した根本的な真理」とは「三位一体における単一なる神と単一なる三位一体」であるとして、これは「 $3 = 1$ そして $1 = 3$ 」と図式してその教義神学を批判した³⁹⁾ように、オーウェルも $2 + 2 = 5$ として政治と宗教に対する知的誠実さを問うているところである。小説『1984年』は読者へ、オブライエンあるいはゴールドスタインの姿となってスウィフト的諷刺で知的に挑戦している。オーウェルはそれへの答えを作品の中で、そして他の著作の中で暗示している。ここにも「あまりにも正気であり、また同時にあまりにも愚鈍であるために全体主義的な考えが身につかない」⁴⁰⁾とする諷刺の眼があるが、それは人間性のまともさを保ち続けているプロールであり、さらにアクトン卿の「権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に腐敗する」に通じる主張でもある。しかしその見通すものは「破滅を覚悟する」厳しいものであった。『オーウェル著作集』を編集する時、彼の二度目の妻ソニアはいくつかの重要なエッセイを割愛した。そこには『1984年』を書きはじめた時期もある。そこには、人間性がまず第一に^{デーセント}まともであり、限界のない進歩がありうるという「この信念は、ロシア革命への道を準備した地下のセクトを含めての社会主義者運動の主要な原動力であり、現在はいばらばらの少数者である黄金郷を夢みる人たちが社会主義者の伝統の真の保持者である、と主張し得る」⁴¹⁾としている。『1984年』の社会学的想像は深い。その深さに人は畏怖と感動を覚え、それは人を使命的存在にする。

最後にジョン・ウェインが価値あるとした「オーウェルとスウィフトとの対話」をみてみよう。これは、話し手のオーウェルと、冥界から現われたスウィ

フトがその作品である『ガリヴァー』を語るという二重、三重の評論的、小説的構成になっている。今、スウィフトは『ガリヴァー』の最後の文章を読んでいる。これをオーウェルの全作品にみられるテクニクの象徴として、またオーウェル自身の訴えたい象徴的な言葉として締めくくりに使おう。

スウィフト：（声は少し強くなり、それからとうとう消えた）『実際この醜悪なる動物（人間）と、このはなはだしい悪法とがどうしてこううまく結びついたものか、これだけは我輩にとって永遠の謎だろうと思う。だからして多少でもこの僭上の悪法に染まったものは、どうか我輩の前に近づくことをしないように、ここに改めて懇願しておく次第である』（中野好夫訳）

オーウェル：彼は行ってしまった。彼はたいして変っていなかった。彼は偉大な人物であったが、部分的に盲目であった。彼は一度に一つのものしか見ることが出来なかった。彼の人間社会のヴィジョンは非常に洞察力があるが、結局は間違っている。彼は最も素朴な人々が見えるものが見えなかった。即ち人生は生きる価値があり、人間はたとえ汚れて愚かであっても大部分はまともなのだ⁴²⁾。

注

- 1) George Orwell; The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell (Penguin Books) (以下 CEJL と略): Vol. IV, p. 564 なお訳は主として平凡社版『オーウェル著作集』によった。
- 2) バーナード・クリック・河合秀和訳『ジョージ・オーウェルーひとつの生き方』（岩波書店）（以下、クリック『ジョージ・オーウェル』と略）およびオードリー・コバード、バーナードクリック編・オーウェル会訳『思い出のオーウェル』（晶文社）は全体のオーウェル像を日本に紹介した。
- 3) Cinena square Magazine No. 36 (シネマスクエアとうきゅう) および後でふれるクリックの批評版『1984年』では pp. 38-39. (以下クリック版『1984年』と略)

- 4) The Irish Times, Friday, November 9, 1984.
- 5) CEJL, IV, pp. 192-215.
- 6) Los Angeles Times, Wednesday, April 16, 1986.
- 7) Sunday Times, 2 March, 1986.
- 8) The Complete Works of George Orwell (以下『改訂版』と略): One: Down and Out in Paris and London, p. xxxi (Secker & Warburg)
- 9) クリック版『1984年』 pp. 448-449
- 10) Ibid., p. 136
- 11) 『改訂版』3, A Clergyman's Daughter, p. 299
- 12) 『改訂版』1, Down and Out..., p. 224 なお晶文社版の小林訳は意味がとりにくい。
- 13) クリック『ジョージ・オーウェル』下, p. 133
- 14) The Listener, 21 March, 1985 これおよび前記の新聞はオーウェル会の奥山氏よりのもの。なお、大石健太郎「オーウェルとフォスターとBBC」早稲田大学「英文学」62号。
- 15) W. J. West (ed.), Orwell: The War Broadcasts (Duckworth/BBC, London, 1985) (以下『戦時放送』と略)
- 16) クリック版『1984年』 p. 107
- 17) Robert A. Lee; Orwell's Fiction (University of Notre Dame Press) p. 107
- 18) George Orwell; The Road to Wigan Pier (Penguin Books), p. 128 (以下 Wigan と略) および CEJL, III, p. 307 では見たと云っているし、クリック『ジョージ・オーウェル』上, p. 182では否定している。
- 19) CEJL, I, p. 347
- 20) George Orwell: Nineteen Eighty-Four (With a Critical Introduction and Annotations by Bernard Crick), (Clarendon Press, Oxford, 1984)
- 21) Ibid., p. 449
- 22) 高山誠太郎『ジョージ・オーウェルの笑い』(金星堂)の中で「『1984年』の大道具, 小道具」にもふれられている。
- 23) クリック版『1984年』, p. 15

- 24) 和田敏英:『「ガリバー旅行記」論争』(開文社出版)を参照
- 25) CEJL, IV, p. 253
- 26) ジョージ・ウドコック, 奥山康治訳『オーウェルの全体像』(晶文社) p. 344 および彼の『アナキズム I』(白井厚訳・紀伊国屋書店) p. 111
- 27) 『ガリバー』論争, p. 230
- 28) クリック版『1984年』p. 389
- 29) Wigan, pp. 139-140
- 30) 『トルストイ全集 14』(河出書房新社) pp. 352-353, ただし訳は『ロマン・罗兰全集 14』(みすず書房)の宮本正清訳を使用。
- 31) Wigan, p. 128
- 32) Richard Rees: George Orwell-Fugitive from the Camp of Victory (Secker & Warburg), pp. 52-53
- 33) 奥山康治「オーウェルとエスペランティスト」早稲田大学「人文論集」24号
- 34) Stephen Wadhams (conceived and compiled), Remembering Orwell (Penguin Books), p. 42
- 35) CEJL, II, p. 33
- 36) CEJL, IV, p. 147
- 37) CEJL, I, p. 27
- 38) CEJL, IV, p. 528
- 39) 『トルストイ全集14』p. 21
- 40) CEJL, IV, p. 93
- 41) クリック版『1984年』p. 116
- 42) W. J. West『戦時放送』p. 116